

欧州経済協力連盟の創設（I）

小島 健

【要 旨】

欧州統合の歴史は中世にまで遡って考えることもできるが、現在のEUの原型が形成されたのは第二次大戦後の復興の後半局面にあたる1950年代前半のことである。1952年の欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）の設立がそれである。

本稿の目的は、ECSC設立前の欧州統合運動を考察することにある。欧州諸国政府が統合に向かって動くには、1945年の終戦後の民間における統合運動が大きく影響していた。しかし、従来の統合史研究は政府間ないし各国経済間の関係の分析に焦点が当てられ、非政府組織による欧州協調の動向に関心を払ってこなかった。こうした研究上の空白から、なぜ1950年代に入って大陸ヨーロッパ諸国政府が経済統合に向けて急速に舵を切ったのか、その背景にどのような人物や団体が影響を与えていたのかが明らかではなかった。

本稿で考察する欧州経済協力連盟は、ヨーロッパの自由主義的政治家、経営者を中心として1940年代後半に結成され、経済統合についての研究、政策提言を行い、欧州統合を経済面から進める潮流を形成した。本稿では同連盟の設立期における活動を検証し、欧州統合が経済面で進展した背景の一端を明らかにする。

【キーワード】：ヨーロッパ統合，非政府組織，欧州経済協力連盟

目次

はじめに

第1章 欧州協力独立連盟構想（以上，本号）

第2章 連盟設立の準備作業

第3章 連盟設立と欧州運動

第4章 ハーグ会議の開催

むすび

はじめに

1940年代後半のヨーロッパでは、各国政府に先駆けて民間における欧州統合運動が活発化した。欧州諸国政府が統合に向かって動くには、民間における統合運動が大きく影響していた。1940年代後半にこれらの民間団体は欧州運動(The European Movement)として組織化されることになった。すなわち、1948年5月、オランダのハーグにおいてチャーチル(Winston Churchill)を議長に欧州会議(Congress of Europe)が開催され、欧州運動が発足した。会議には多くの統合主義者が参加し、これを受けて欧州各国は翌1949年に欧州審議会(Council of Europe)を設立した。しかし、従来の統合史研究は政府間ないし各国経済間の関係の分析に焦点が当てられ、政府や政治家の背後にあって活動していた非政府組織の活動や役割についての研究は少ない。

本稿が考察の対象とする欧州経済協力連盟は、こうした民間団体の一つであるが、その設立は1946年に遡り今日も活動を続ける団体である。設立の中心となったのはベルギーの首相・外相を務めたヴァンゼーラント(Paul van Zeeland)で、メンバーの多くは経済界の人間であり、活動の目的は欧州の経済面での統合である。戦後の欧州統合が経済面での統合から始まった点を考えると、連盟が欧州統合史において重要な役割を演じたことが予想される。

連盟についての研究は、リップゲンス(Walter Lipgens)による欧州運動研究の中でまず行われた¹。リップゲンスらの研究によって、連盟設立期の活動の実

態はある程度明らかになった。しかし、研究は連盟中央事務局史料や個人文書などの史料を十分用いず、全容を明らかにするまでには至っておらず、また設立の時期についても誤りを連盟の文書によって指摘されていることから明らかなように不十分なものであった²。

その後、欧州経済協力連盟についての研究を進展させたのは、ベルギーの歴史家デュムラン(Michel Dumoulin)である³。デュムランはリップゲンスらと同様に連盟中央事務局の史料を用いる一方、ベルギー王立公文書館に所蔵されているヴァンゼーラント文書を活用することで設立期の連盟の実態に迫った。これによって、連盟設立がヴァンゼーラントによって企画されたのはリップゲンスが言う1946年春ではなく同年秋のことであることも分かった。ただし、ヴァンゼーラント文書は彼の活動のすべてを伝えるほど十分なものでなく、連盟中央事務局史料も整理された状態になく、設立期の連盟の活動について未解明の点が多く残されてきた。

ところが、近年になり連盟関係の史料がデュムランの指導の下で整理された。まず、ヴァンゼーラントについては、王立公文書館所蔵の文書に彼の遺族から寄託された文書を加えてルーヴァン大学において整理・分類され、同大学の文書室で閲覧できることになった⁴。連盟中央事務局史料も同じくルーヴァン大

¹ Lipgens, Walter, *A History of European Integration*, Vol. 1, Oxford, 1982. 原著は *Die Anfänge der europäischen Einigungspolitik, 1945-1950, Erster Teil: 1945-1947*, Stuttgart, 1977; Gisch, Heribert, "The European League for Economic Co-operation (ELEC)", Lipgens, W. and Loth, W. (eds.), *Documents on the History of European Integration*, Vol. 4, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1991.

² 「リップゲンスは独立連盟設立を(1947年)3月7日とみており不正確な情報を与えている」。Van der Velden, M., *European League for Economic Co-operation: The Origins of the European League for Economic Co-operation*, Bruxelles: E. L. E. C., 1995, p.10, Footnote 2.

³ Dumoulin, Michel, "Les début de la Ligue européenne de coopération économique (1946-1949)", *Res Publica*, vol. XXIX, n. 1, 1987 (本論文の入手においては廣田功氏(新潟大学)のお世話になった。記して謝意を表す); Dumoulin, Michel et Dutrieue, Anne-Myriam, *La Ligue Européenne de Coopération Économique (1946-1981)*, Berne: Peter Lang, 1993.

学に寄託され、同大学で整理・分類され閲覧可能になった⁵。

本稿は、これらのルーヴァン大学文書室所蔵のヴァンゼーラントと連盟中央事務局の史料に基づき、第二次大戦直後からの連盟設立にいたる経緯と連盟の目的と性格を明らかにすることを目的とする。また、こうした欧州運動において経済面を担った連盟の研究は、ハーグ会議を開催し欧州審議会の設立を欧州各国政府に迫った欧州運動の実態を解明することにもつながる。

第1章 欧州協力独立連盟構想

第1節 ヴァンゼーラントの思想と活動

(1) 第二次大戦前後のヴァンゼーラントの活動

ヴァンゼーラントは戦前ベルギーの首相を務めた人物である⁶。彼はベルギー国立銀行理事であった1933年に出版した『ヨーロッパの概観 1932年』⁷で当時の大不況に直面した世界に対する救済策として自由貿易を積極的に主張し注目された。そして、経済困難に直面したベルギー国王は1935年3月に彼を首相に指名した。カトリック党、自由党、労働党によるヴァンゼーラント内閣は1937年10月まで続き不況克服に成功した。このため、自由主義的経済学者であり政治家でもある彼の名は世界的に知られることになった。

⁴ Dubois, Sebastien, *Inventaire des papiers de Paul van Zeeland (1893-1973)*, Louvain-la-Neuve: Université catholique de Louvain, 1999(以下、ヴァンゼーラント文書については、PvZ, UCLと略記)。なお、この再分類において、これまで王立公文書館で用いられていた分類番号は継承されなかったため、先行研究で用いられた史料であるか正確に確認することは不可能になった。

⁵ Grobois, Thierry, et al., *Inventaire des archives de la Ligue Européenne de Coopération Économique (1946-1985)*, Louvain-la-Neuve: Université catholique de Louvain, 2003(以下、連盟史料については、ALECE, UCLと略記)。

⁶ ヴァンゼーラントについて一次史料に基づく信頼できる評伝としては次がある。Dujardin, Vincent et Dumoulin, Michel, *Paul van Zeeland 1893-1973*, Bruxelles: Racine, 1997。

⁷ Van Zeeland, Paul, *Regards sur l'europe 1932*, Bruxelles: Office de Publicité, 1933。本書は英語とオランダ語にも翻訳されている。

イギリス、フランス両政府は、1937年4月ヴァンゼーラント首相に対して国際貿易における障害を除去し貿易を拡大させる可能性についての研究を委嘱した。この要請は前年9月に英米仏によって発表された三国通貨協定に基づき、国際経済の再建を実現するためのものであった。ヴァンゼーラントは首相在任中にこの作業を経済官僚であるフレール (Maurice Frère) の助力を得て行い、研究結果を1938年1月に発表した⁸。このヴァンゼーラント報告は、国際貿易を阻害している要因を分析し、解決策として地域的・集团的協定や国際的な経済協力協定による貿易障壁の緩和を提案した。また、こうした協定を実現するために国際連盟や国際決済銀行が大きな役割を果たすことを強調した。ヴァンゼーラント報告は戦後における欧州経済統合を先取りした側面を持つ⁹。

第二次大戦中、亡命したヴァンゼーラントは戦前の反省と戦後再建を念頭に、ヨーロッパ経済空間の細分化の原因と結果に関する考察を深めた。その一つはポーランド亡命政府の首相シコルスキ (Wladyslaw Sikorski) による戦後ヨーロッパ地域協力についての計画に関して行なわれた。1942年12月26日ヴァンゼーラントは、ポーランド政府の要請に応える形で「戦後ヨーロッパ経済再建に関する重要ないくつかの点についての予備ノート」を連合政府の外相に送付した¹⁰。このなかでヴァンゼーラントは、経済再建は国際協力に基礎を置くが、それは地域的機関の創設と矛盾しないことを強調した。

また、彼はロンドンのベルギー亡命政府によって1941年に設立されたベルギー戦後問題研究委員会 (Commission belge pour l'étude des problèmes d'après-guerre) の委員長に就任し戦後再建問題の研究を指導した¹¹。委員会は、

⁸ Report presented by M. van Zeeland to governments of the United Kingdom and France on the possibility of obtaining a general reduction of the obstacles to International Trade, January 1938. 報告は、以下に再録。 *International Economic Reconstruction by Paul Van Zeeland with a comment by Walter Lippman*, New York/London: Garland, 1972.

⁹ ヴァンゼーラント報告の評価については、小島健「世界大不況におけるヴァンゼーラントの政策提言」、『欧州建設とベルギー』日本経済評論社、2007年、第3章、を参照。

¹⁰ Jaspard, Marcel-Henri, *Changements de décors*, Paris: Fayard, 1972, p. 69; Dumoulin, "Les débuts de la Ligue européenne de coopération économique (1946-1949)", p. 100.

1941年7月に第一次報告書¹²を提出したのをはじめに合計6つの報告書を亡命政府に提出した。報告書のうち第一次報告書と1943年8月の第五次報告書¹³は国際問題を扱っており、とくに第一次報告書は1938年のヴァンゼーラント報告への言及もある。委員会の主張は、ヴァンゼーラント報告に基づいて自由な交易と国際機構の役割を重視したものであった。

1944年9月のベルギー解放によりヴァンゼーラントの戦後問題研究委員会委員長の職は終わるが、直ちに彼は本国送還統括委員(Le commissariat au rapatriement)としてベルギーの戦後復興に寄与した。そして、1946年には国王(ただし当時は国王不在のため摂政)指名の上院議員となり政界に復帰しその後10年間この職に就くことになる¹⁴。

当時国際的に著名な経済学者であったヴァンゼーラントは1945年10月15日フランスの経済関税行動委員会(Comité d'action économique et douanière: CAED)の招きに応じてパリで講演を行った。経済関税行動委員会は1925年に大商店経営者のラクール＝ガイエ(Jacques Lacour-Gayet)によって創設された。委員会はフランスと諸外国および海外領土との通商関係を発展させることを目的として、これらのある関税を引き下げるために活動した自由主義的な経済団体である¹⁵。委員会は第二次大戦中も存続し、戦後は自由主義的な欧州統合を目指して活動し、リュエフ(Jaques Rueff)やフェーブル(Lucien

¹¹ Grosbois, Thierry, "Les projets des petites nations de Bénélux pour l'après-guerre 1941-1945", Dumoulin, Michel, (ed.), *Plans des temps de guerre pour l'Europe d'après-guerre 1941-1947*, Bruxelles: Bruylant, pp. 95-97; 小島健「ヨーロッパ統合の中核—ベネルクス経済同盟—」, 渡辺尚編著『ヨーロッパの発見』有斐閣, 2000年, 127-128頁。

¹² PvZ, UCL, No. 217, Avant-projet de rapport liminaire sur les travaux de la Commission belge pour étude des problèmes d'après-guerre, 31 juillet 1941.

¹³ PvZ, UCL, No. 220, Cinquième rapport de la Commission belge pour l'examen des problèmes d'après-guerre, 17 août 1943.

¹⁴ Dujardin et Dumoulin, *Paul van Zeeland*, pp. 145-146.

¹⁵ Badel, Laurence, *Un milieu libéral et européen: Le grand commerce français 1925-1948*, Paris: Comité pour l'histoire économique et financière de la France, 1999, p. 3.

Febvre)など第一線の人物を招待して講演会を開催した¹⁶。

(2) ヴァンゼーラントの欧州統合案

1945年10月のヴァンゼーラントの「ベルギーと西欧」と題された講演は、同年経済関税行動委員会によって出版され、翌年にはベルギーでも出版された¹⁷。以下、ベルギー版によってヴァンゼーラントの見解を見ておこう。

同書は三章からなり、第一章は「普遍主義と地域主義」と題され、ヴァンゼーラントは次のように述べている¹⁸。世界の一体化は第一次大戦前から経済面や社会面で進んでおり、原爆などの兵器が使われた第二次大戦は地球が共通の運命から逃れられないことを示した。そこで国際組織が必要とされるが国際連盟は失敗した。失敗の原因として、全会一致の規定と中間組織の欠如がある。新しい組織においては、加重多数決システムと中間組織の設立が必要である。また、権限は各機関に配分されるべきで、国際機関の基礎には国民国家がある。また、国民国家の内部では、国家がすべての権限を独占すべきではなく、市町村や県などの下位レベルにも権限を配分すべきである。

他方、国際レベルにおいては国民国家から出発して上級の国際連盟に替わる世界機関を作る必要性が高まっている。国民国家と世界機関の間には二種類の間接組織が必要である。第一は垂直的または機能的性格の組織であり、国境や地域の境界を横断する機能を担うものであり、例えば国際司法裁判所や国際決済銀行などがこれに当る。第二は水平的性格のものであり、地域的集団のことである。ここで地域という場合、それは単に地理的な近接性にとどまらず、精神的近親性、歴史的記憶、生活概念の類似性も含まれる。

第一章の結論としてヴァンゼーラントは、国際機構の中間組織として地域集団を重視し、地域集団が普遍主義への段階と手段であると述べる。こうした階層秩序の考えは、彼が支持するカトリック社会教説の補完性原理と通じてい

¹⁶ Dumoulin et Dutrieue, *La Ligue européenne de coopération économique*, pp. 11-12.

¹⁷ Van Zeeland, Paul, *La Belgique et l'occident européen*, Bruxelles: Le Marais, 1946.

¹⁸ Van Zeeland, *La Belgique et l'occident européen*, pp. 7-13.

る¹⁹。

第二章の表題は「地域集団」である²⁰。ヴァンゼーラントはまず、不必要な困難を避けるため経済的観点から考察することを主張し、地域集団の設立の根本には生産の増大と交易の自由化の二つの目的があると述べる。これらの経済的目的を達成する方法として地域集団化は関税同盟と通貨同盟によって実現される。これらの実現には困難があるのは分かるがベルギー・ルクセンブルク経済同盟のように成功した例がある。また、もし地域集団が他の地域との交易を関税障壁などによって阻害すればすでに経験したように世界の関税障壁は高まり世界平和にとって危険となると述べる。そして、1938年のヴァンゼーラント報告に言及し、そこで述べられた国際経済関係の自由主義的解決策がこうした危険を回避すると主張した。

また、地域集団内部では労働基準、金融政策、財政、経済政策、社会政策については最低限の調整と協調が図られなければならず、そのために権限を持つ調整のための委員会を設立すべきである。委員会において、加盟国は国の大小に関わらず権利は平等とされる。委員会は民主的に運営され、全会一致が不可能な重要案件については2/3か3/4の特定多数決とする。このように、ヴァンゼーラントは委員会においてベルギーのような小国の意志が尊重されやすい決定方法を提案した。こうした運営方法は、後の ECSC (欧州石炭鉄鋼共同体) や EEC (欧州経済共同体) の決定機関である理事会で実際に採用された。

最後の第三章は「西欧」と題されている。ヴァンゼーラントはこれまで述べてきた地域主義と地域集団の考えが西欧に適用する時期がやってきたとの判断を示す。すなわち、今日の西欧の現実は一層バラバラな状態であるが、深部には精神的にも物質的にも大きな類似性が存在している。これまで検討してきた経済面での西欧集団化を行うのであれば、現実的に考えて「フランス、イギリス、オランダおよびベルギーにこの中核を形成することを要求」²¹する。ただし、

¹⁹ 補完性原理とヴァンゼーラントの思想については、「世界大不況におけるヴァンゼーラントの政策提言」、小島『欧州建設とベルギー』第3章を参照。

²⁰ Van Zeeland, *La Belgique et l'occident européen*, pp.15-25.

²¹ Van Zeeland, *La Belgique et l'occident européen*, p.29.

これらの国は今後加盟する国に対していかなる優先権や特権も与えられない。なお、西欧集団の中核にドイツが入っていないのは、ドイツ敗戦の年に行われた講演であることから当然といえよう。

この西欧集団は一方で大西洋・西半球、他方でソ連・東欧から理解されるようにすべきである。とくに、ソ連との和解は、世界の平和と安定した国際経済関係にとって重要である。このように、ヴァンゼーラントの考えは冷戦思考ではなく、社会主義圏との友好的な関係を追及していた。

次に国家主権との関係が述べられる。ヴァンゼーラントは、国民国家の主権の廃止は問題にならないことを認めた上で、感情的ナショナリズムよりも理性的国際主義が戦後必要であることを主張する。むしろ、戦争で祖国に尽くした人々の理性も国際機関や国際主義が彼らの目的にとって不可欠であることを認めていると言う。すなわち、国際組織が各祖国を尊重し保護するのであれば、祖国愛と国際主義は一致する。国民国家は存続することができるが、しかし、いくつかの権限を国際機関に移管する必要がある。

また、祖国愛と国際主義の妥協は小国にとって絶好の防衛策となる。小国もその運命の主人公として存続し、教育、言語、レジャーなどを選択する自由を有し、大国と平等の立場で上位機関に結びつく。かくしてヴァンゼーラントの描く西欧国際機関においてベルギーのような小国は、かつてのようにその立場を脅かされることがなくなる。

経済的観点からも西欧のグループ化は正当化される。すなわち、第二次大戦後の世界において生産技術は向上した。これは大市場を持つ大国には適しているがヨーロッパの国はどこも国内市場が狭隘である。大戦を期に南米の農業国も工業化を始めた。アメリカでは大戦中に飛躍的に技術力が向上し、プラスチック、アルミニウム、マグネシウムなど素材面での進歩に加えて、生産や販売方法においても急速に改善した。そして、これらの新しい経済のすべてが広大な国内市場を必要としている。

ヴァンゼーラントは、こうした西欧集団化を行う主体として政治家と実業家を挙げ彼らエリートが努力することに期待を示す。そして、戦争の終結は西欧集団化と世界の恒久的組織を設立する好機であると呼びかけた。

第2節 レティンゲルの活動と統合思想

ヴァンゼーラントは1946年にロンドン時代に親交を結んだレティンゲル(Józef Retinger)と欧州のために行動する必要についてしばしば話し合い、多くの点で理解しあうことができた²²。レティンゲルはポーランド人でロンドン亡命政府のシコルスキ首相の顧問となりロンドンでよく知られた人物であった²³。

レティンゲルは、1946年5月7日ロンドンの王立国際問題研究所で「欧州大陸?」と題する講演を行い、欧州大陸の今後について述べた。この講演は、同年8月30日付けのあとがきを付して私的に出版された²⁴。以下、欧州大陸の統合に関する部分を中心にこの書物を検討する。

彼は、まず、ローマ時代以来一体であった欧州大陸が最近200年の間に優越性だけでなく一体性をも喪失しつつある点を指摘する。その原因は海外植民、欧州の外の大国による欧州大陸への関与、1914年以降は大陸の大国が機能しなくなり、小国も大陸を結束させる力も意思も持たないことを挙げる。大陸の重要問題は平和の達成と安全保障であるが、この間示されたヒトラーの「新秩

²² Dumoulin et Dutrieue, *La Ligue européenne de coopération économique*, p. 20.

²³ レティンゲルは1988年クラブ生まれで、1960年6月12日ロンドンで亡くなった。彼は、フランスで文学博士の学位を取得しアンドレ・ジイド(André Gide)の友人でもあった。レティンゲルの生涯については、1948—1960年に彼の個人秘書を務めたポミャンが編集した次の書物が詳しい。Pomian, John (ed.), *Joseph Retinger: Memoirs of an Eminence Grise*, Sussex: University Press, 1972. また、松家仁氏(小樽商科大学)よりレティンゲルについて日本語で書かれた梅田芳穂「EU設立とユゼフ・ヒェロニム・レティンゲル」(<http://www.e.okayama-u.ac.jp/~taguchi/kansai/umd05.htm>)およびポーランド語のWitkowski, Grzegorz, *Józef Retinger, polski inicjator integracji europejskiej*, Warszawa: Stowarzyszenie Współpracy Narodów Europy Wschodniej, Zblizenie, 2000をご教示いただいた。記して感謝する。

²⁴ ALECE, UCL, No. 15, Retinger, Joseph H., *The European Continent?: An Adress given on 7th May, 1946, with a postscript dated 30th August, 1946*, Privately Published, 1946.本書のコピーは、欧州経済協力連盟中央事務局所蔵の“Origines de la L.E.C.E., Retinger”と題するファイルにも保管されている。また、戦中からのレティンゲルの欧州統合思想については、Grobois, Thierry, “L’action de Józef Retinger en faveur de l’idée européenne 1940-46”, *European Review of History*, Vol. 6, No. 1, 1999も参照。

序」も社会主義イデオロギーも精神的独立性を保障するものではなく大陸は拒否した²⁵。

しかし、欧州大陸は変化を理解し前進するためにそして欧州諸国の十分な協力を得るための新しい構想を持った。それが、1939年11月にロンドンで発表されたシコルスキの計画であり、レティンゲルはこの計画の意義を強調する。すなわち両大戦間期の経験から良好な経済的基盤が必要であり、欧州大陸の問題は平等と相互の義務を基礎に解決すべきである。そのための方法として、欧州に5～6の連邦化された国家ブロックを形成する。これらの連邦は、経済的・軍事的能力においてほぼ同じである。例えば、ポーランドのブロックにはチェコ・スロヴァキア、ハンガリー、ルーマニアそして恐らくオーストリアが入る²⁶。

シコルスキの欧州大陸諸国協力案は、シコルスキやレティンゲルが、イギリス、ベルギー、ユーゴスラヴィア、オランダ、ギリシャの要人と会談した結果到達したものである。また、以前よりチェコ・スロヴァキアのベネシュ (Eduard Beneš) やマサリク (Tomáš Masaryk) とは合意していた。シコルスキ案はチャーチルやイーデンが考えている対ソ防疫線とは違う。スターリンとシコルスキはこの提案について話し合っており、1941年12月4日には共同宣言を出している。そして、ポーランドが主導するこの提案に関する大陸諸国の首脳会議は、1943年のシコルスキの死まで続けられた。また、チェコ・スロヴァキア亡命政府首相ベネシュとは中欧ブロックについて仮合意にまで達した。

ところが、1943年7月の飛行機事故によるシコルスキの死によりソ連とポーランドの協力も消滅し、いくつかの大国による自己満足や対立の結果、欧州大陸が東西に分裂する種が蒔かれた。レティンゲルが懸念するのはヨーロッパの東西分裂により、ソ連とアングロ・サクソンの戦場となった欧州「大陸が勝者の戦利品となり、この過程で大陸が破壊される」²⁷ことである。

しかし、レティンゲルは東西の対立は回避可能であると述べる。なぜなら、

²⁵ Retinger, *The European Continent* ?, pp 1-2.

²⁶ Retinger, *The European Continent* ?, p. 6. なお、この領域は第一次大戦前のオーストリア＝ハンガリー帝国とほぼ重なる。

²⁷ Retinger, *The European Continent* ?, p. 7.

両者は第二次大戦を勝利に導くことに貢献した仲であり、多くの対話の積み重ねによって亀裂に架橋することができる。また、対立が長期化している現状から分かるように、これ以上の犠牲を避けたいとの思いは強い。いずれ疑いは除去され、地政学的に経済協力の道は開かれる。とくに両者の間に中立の自由地域を作れるならば欧州大陸が再び一体になれる日が来るであろう²⁸。

さらに、彼は1946年8月30日付けのあとがきで次のように記した。「現状から表皮を剥ぎ取れば東西で戦いが行われていることは明白である」。欧州大陸は自らを統一することが出来ず、周辺の大国（米英ソ）は欧州「大陸なしに、大陸に相談することすらなく」²⁹ 干渉し、われわれの運命を決めようとしている。「しかしながら、西欧小国が協議を始めることは可能であり、この枠組みにおいて統一された大陸が建設される可能性がある」³⁰。

このように、レティンゲルは西欧小国が欧州統合のイニシャチヴを取ること期待し、英仏ベネルクスが統合の中核となるとするヴァンゼーラントとは力点に相違があった。また、彼はソ連を欧州大陸の国には含めず、イギリスも海外利害が大きいとの理由から欧州大陸の外に置いた。

第3節 連盟設立協議

レティンゲルは講演の数週間後にブリュッセルに行き、ヴァンゼーラントと長時間会談をした。両者はここで「欧州統合の考えを復活させることに努力すべきであり、まずは経済分野に欧州統合を適用する」³¹ ことで合意した。ただし、この会談をもってレティンゲルが「われわれは経済協力独立連盟を発足させた」、ベルギーの有力政治家である「ポール＝アンリ・スパーク (Paul-Henri Spaak) とロジェール・モッツ (Roger Motz) とともに私はベルギーで会い、両者ともこの考えに同意してくれたのが、連盟が1946年6月にブリュッセルで発足したとする理由である」³² と述べているのは誤解を与える。なぜなら、6

²⁸ Retinger, *The European Continent* ?, p. 8.

²⁹ Retinger, *The European Continent* ?, p. 9.

³⁰ Retinger, *The European Continent* ?, pp. 9-10.

³¹ Pomian, *Joseph Retinger*, p. 210.

月の時点では欧州統合について意見の一致があったのみであり、次に見るように連盟の設立に向けた活動は同年秋のことだからである。これは、まずデュムランの研究によって明らかにされ³³、連盟の公式見解ともなっている³⁴。

連盟設立を具体的に話し合ったのは1946年秋のことである。9月17日、ヴァンゼーラントはブリュッセルでレティンゲルと会談した³⁵。これは、イギリス前首相チャーチル(Winston Churchill)が、チューリッヒ大学において欧州合衆国(United States of Europe)の建設を提案する演説を行い世界に衝撃を与えた2日前のことである。会談のテーマは、西洋文明の理想、概念および役割を擁護するために欧州独立連盟を創設することであり、両者は合意した。この構想はレティンゲルの東欧を含む複数連邦ブロック案よりもヴァンゼーラントの西欧地域協力の提案に近いものであるといえる³⁶。

連盟を設立するために、フランス、オランダ、ベルギーなどを中心に組織委員会を結成することが提案された。組織委員会の委員候補には、各国の有力な政治家や経済人の名が候補に挙がった。すなわち、フランスはスリュワ(Daniel Serruys)³⁷、イギリスはランドルフ・チャーチル(Randolph Churchill)³⁸あるいはアスター(John Astor)、オランダはケルステンス(Peter Adrian Kerstens)、ポーランドはレティンゲル、ルクセンブルクはコンスブルク(Guill Kongsburg)、ギリシャはピピネリス(Panayotis Pipinelis)でありベルギーについては未定だった。

³² Pomian, *Joseph Retinger*, p. 210.

³³ Dumoulin et Dutrieue, *La L. E. C. E.*, pp. 20-21.

³⁴ Van der Velden, M., *The Origins of the European League for Economic Cooperation*, Bruxelles: E. L. E. C., 1995, p. 5.

³⁵ PvZ, UCL, No.1304, "Mémorandum. Conversation avec Rétinger, le 17 septembre 1946 au soir.

³⁶ Van der Velden, *The Origins of the E. L. E. C.*, p. 5. cf. Dumoulin et Dutrieue, *La L. E. C. E.*, p. 23.

³⁷ スリュワは、ヴェルサイユ条約交渉の代表団秘書を務めた後、多くの重要な国際的な経済・金融協定に関与し、経済関税行動委員会の有力メンバーである。スリュワについては Pomian, *Joseph Retinger*, p. 211; Badel, *Un milieu liberal et européen*, p. 422, を参照。

³⁸ ウィンストン・チャーチルの息子でジャーナリスト (1886-1971年)。

2人の話し合いの結果、レティンゲルが組織委員会の事務局長ないし中心的役割を引き受け、ヴァンゼーラントはパリでスリュワと会い、場合によってはビドー(Georges Bidault)などとも会うことになった。ヴァンゼーラントとレティンゲルは、まずオランダのケルステンス上院議員に連盟の共同創設者となってくれるよう依頼し、彼の承諾を得た。ケルステンスは1896年生まれのオランダの政治家、著述家である。彼は戦前からカトリック党のリーダーとして活躍し、ロンドン亡命政府では経済・海運大臣を務めた。また、いくつかの新聞の編集長や執筆者を務めており社会的影響力の大きな人物だった³⁹。

1946年10月17日、ブリュッセル郊外にあるヴァンゼーラントの私邸メゾン・フラマンド(Maison Flamande)で連盟設立の会合が持たれた⁴⁰。これには、ヴァンゼーラント、レティンゲル、ケルステンスの3人の創設者に加えてヴァンゼーラントの秘書フォルス(Willy Faulx)とデュピュイ(Pierre Dupuy)在ハーグ・カナダ大使も同席した⁴¹。まず、ヴァンゼーラントから当日午前に行われたレティンゲルとの会談にもとづく報告がなされた。

報告の第一は手段についてであり、まずヨーロッパ人に典型的な行動を行うための独立団体を結成することとされた。そのためには以下のようないくつかの段階を必要とする。a)「運営委員会」の設立。b) 同委員会は最終的には組織の中央事務局となる。中央事務局は各国委員会の委員長と協力メンバーによって構成される。c) 各国に国内委員会を設立する。d) 1947年4月に各国委員会の大会を開催する。e)「後援者委員会」の設立である。

報告の第二は独立団体の名称である。独立団体は政府に対して自立しているという意味である。しかしながら、以下のような政府の保証を得る必要がある。すなわち、組織は彼らの個人的な善い自発的意思を当てにすることができ、ま

³⁹ PvZ, UCL, No.1310, Curriculum Vitae and From the International Who's Who.

⁴⁰ PvZ, UCL, No. 1320, Mémorandum d'une conversation à la Maison Flamande, le 17 octobre 1946.

⁴¹ この会合の要点をまとめたものとして以下のノートがある。PvZ., UCL, No. 1320, Note sur les buts de "L'Association Indépendante d'Action Européenne", Bruxelles, le 9 décembre 1946.

た、わが団体に対するいかなる否定的な行動もなされないという保証である。この後6～8週間以内に政府に対して口頭でアプローチし、次いで11月末に「運営委員会」を次の目的のために開催する。すなわち、世論へのアピール計画、政府宛書簡の計画、発展すべき思想の完成、財政問題の検討、会議の準備である。

ヴァンゼーラントの報告の最後は、追及すべき政策であり2点ある。第1点は長期的目標である。それは、まずヨーロッパをその理想、統一、文明において再建することである。また、何段階かの地域的集団によってヨーロッパ連合に到達することである。それは、例えば西欧集団、スラブ諸国の集団、バルカン諸国の集団などがある。

第2点目は接近方法であり、それは知的でかつ経済的でなければならず、知識人と政治家に訴える。

次に、会合出席者の今後の活動の割り当てが決められた。ヴァンゼーラントは、ベルギー政府への接近を計り、フランス、ルクセンブルク両政府とも接触する。また、財政的支援を得るため、企業家の意向を探る。そして、フランス国内委員会に最適な人物を探す。さらに、世論へのアピール案を次回11月会合のために作成する。

レティンゲルは、スラブ諸国、バルカン諸国、アングロ・サクソン諸国と接触する。とくに英米両政府から、とりあえず承認（「祝福」）を受けることが目的であり、しばらくたってから英米にも国内委員会を設立する。

ケルステンスは、すでにオランダ首相に書簡を送っているが返事も反応もない。しかし、国内で10万ドルの資金援助を得た。ノルウェーと（パチカンの仲介で）イタリアに接触する。ケルステンスは、グループ化の第一段階はオランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランス、ノルウェー、ポーランド、チェコ・スロヴァキアに限定されるだろうと予想していた。アングロ・サクソンや南欧諸国が消極的だろうとの観測は連盟の設立を準備した主要メンバーの共通した認識であった。なお、ギリシャに対する接触については、目下のところ政治的紛争地域であることから保留となった。

会合ではまずヴァンゼーラントから以下の三点が結論として確認された。第

一は、最初のイニシャチヴと責任は大陸に属すべきであること。アングロ・サクソンは100%われわれの後でならねばならない。英米においてはわれわれを信頼する人物とコンタクトを持ってから適切な時期に国内委員会を設立する。

第二は後援者委員会に関して、公表する前に道徳的責任を持つ人物のリストを作成する。候補者には、チャーチル、アインシュタイン、そのほか哲学者が考えられる。第三は仮の名称として「欧州行動独立協会」(Association indépendante d'action européenne)が提案された。全員これに賛成した。

次にレティンゲルとケルステンスから次のことが述べられた。第一は、「絶妙のバランス」を取るために次のような組織とすることが提案された。この提案は暫定的に参加者により承認された。すなわち、協会の会長にはヴァンゼーラントが就任する。事務局長は大陸とフランス各一名で次回に候補者を出す。事務局の所在地はオランダ国内でアムステルダムかハーグとする。また、パリで大会を開催する。

第二に彼らは出版物、機関誌、行動方法のためにイギリスやノルウェーの作家に訴えることを提案した⁴²。第三点は彼らとヴァンゼーラントが翌日アスターに会うということだった。

最後に、組織の名称を「欧州行動独立連盟」として、本部をハーグに置き、1947年春にパリで指導者による会議を組織することが決まった。以上の内容から、欧州経済協力連盟では、連盟の設立日を1946年10月17日、設立場所をブリュッセルのメゾン・フランマンドであり、創設者 (Founding fathers) は、ヴァンゼーラント、レティンゲルおよびケルステンスであるとしている⁴³。

⁴² 具体的には、イギリスの Brogan, ノルウェーの Rastadt の名が挙げられた。

⁴³ Van der Velden, *The Origins of the European League for Economic Co-operation*, p. 17, Appendix.